

## 日系二世の少女 Rinko の物語

—— 日系アメリカ人作家 Yoshiko Uchida の「Rinko 物語」3 作品を読む ——

山 本 秀 行

### I

#### (1) 日系アメリカ人作家 Yoshiko Uchida

疑いもなく、Yoshiko Uchida (1921-92) は、現代の日系アメリカ人作家を代表する存在である。現在、彼女の作品は Macmillan, Doubleday など英米の有名出版社から 20 冊以上も本として出版されており、おそらく日系アメリカ人作家としては、最も多くの読者を獲得している作家であろう。彼女は日系二世としては最初の専業作家で、1992 年に他界するまで主に青少年向けの小説を中心に創作活動を行い、その業績に対して多くの文学賞が授与されている。

日系移民の子として Yoshiko Uchida は、1921 年、カリフォルニア (California) 州アラメダ (Alameda) に生まれ、温かい家族愛の中、同州のバークレー (Berkeley) で育った。彼女は、1929 年の大恐慌に象徴される暗い時代に、その当時根強かった日系移民に対する偏見と差別に立ち向かいながら幼年期を送った。<sup>1)</sup> 彼女は幼いときから両親に日本の文化・伝統・価値観を教え込まれ、特に文学好きで短歌を嗜む母親からは最も強い影響を受けている。彼女は名門カリフォルニア大学バークレー校で英語・歴史・哲学を学び、優等で卒業しているが、その在学中に 1941 年の日本軍による真珠湾攻撃とそれに続く太平洋戦争の勃発により、彼女の平穏な大学生活は妨げられることになる。日本と交戦状態に突入したアメリカ合衆国は、敵性外国人として、当時、西海岸諸州に居住していた罪も無い約 11 万人の日系人を 10 の強制収容所に送り込み、身柄を拘束し監視した。<sup>2)</sup> そのような強制収容所の一つユタ (Utah) 州トパーズ (Topaz) の収容所に、住み慣れた土地を追われた彼女も収容された。1 年間にも及ぶつらく屈辱的な収容所生活の後、彼女はアメリカ東部のマサチューセッツ (Massachusetts) 州にあるスミス・カレッジ (Smith College) の大学院で教育学を修め修士号を得た。数年間の教師生活を経て、彼女はニューヨーク (New York) に移り住み、そこで記念すべき最初の本 *The Dancing Kettle* が出版され、作家として初めて世に出た。1952 年からの 2 年間で彼女は Ford Foundation Fellowship により日本で過ごし、日本の民間伝承を集め、伝統芸術や伝統工芸などに興味を持つようになった。その後、彼女は故郷のバークレーに戻り、1992 年に亡くなるまで、児童文学を中心に創作活動を続ける傍ら、講演あるいはテレビ・ラジオ・雑誌等のインタビューで日系二世作家としての自分自身の体験を若い世代に積極的に語り伝えようとした。

## (2) Yoshiko Uchida の作品における「Rinko 物語」

Yoshiko Uchida が、作品の中で描いている人々は、ほとんど全部と言ってよいほど、日系人あるいはその家族であり、したがって題材も日系人である彼女あるいは彼女の両親の体験を元にしたもの、または、彼女が幼いときに両親から聞いたり、2年間の日本滞在中に取材したおとぎ話や民話を元にしたものがほとんどである。

ここで、Yoshiko Uchida の作品をその題材によって大まかに分類してみる。第1グループは、日本のおとぎ話や民話等を題材にして書かれたもので、最初の本 *The Dancing Kettle* の他、*The Magic Listening Cap*, *Rokubei and the Thousand Rice Bowls* などがある。第2グループは、作者の強制収容所での体験を題材にして書かれたもので、*Desert Exile: The Uprooting of a Japanese American Family* の他、*Journey to Topaz*, *Journey Home* のいわゆる「Journey もの」などがある。<sup>3)</sup> 第3グループは、作者が両親などから聞いた移民当初の日系一世の体験を題材にして書かれたもので、*Samurai of Gold Hill* などがある。そして、最後の第4グループは、作者の子供時代を題材にして書かれ、作者の分身とも言うべき日系二世の少女を主人公にしたもので、日系二世の少女 Rinko を主人公とした *A Jar of Dreams*, *The Best Bad Thing*, *The Happiest Ending* という「Rinko 物語」<sup>4)</sup> などがある。

どのグループの作品にもそれぞれの持ち味があり、甲乙付け難いのではあるが、とりわけ第4グループの作品は、日系二世の少女の目を通して見たものが<一人称の語り>の手法によって生き生きとした筆致で描かれており、子供から大人まで読む者の心を掴んで離さない文学的魅力を持っている。また、このグループの作品は日系二世の少女が時代の荒波に揉まれつつも、様々な体験を通して自らの人生を懸命に生き抜き、日系アメリカ人としてのアイデンティティ(identity)を確立し人間的な成長を遂げてゆく、いわゆる「<sup>イニシエーション</sup>通過儀礼」(initiation)を描いた物語とも考えられ、非常に興味深い。中でも、日系二世の少女 Rinko が登場する作品群「Rinko 物語」は、物語の構成、人物描写、表現力、テーマなど、どれをとっても申し分のない出来で、このグループを代表する存在とすることができるだろう。

これから本論では、「Rinko 物語」3作品を、主人公 Rinko が日系アメリカ人としてのアイデンティティを確立してゆく過程に焦点をあて読んでゆくことにする。ただし、その際、1930~40年代のアメリカという、日系移民に対する人種差別的風潮に象徴されるその時代の歴史的コンテキストの中で考えてゆく必要があることは言うまでもない。また、あくまで「日本人」であろうとした一世とは違い、二世 Rinko にとってのアイデンティティは、「自分は何者なのか?」という根源的な問いが常に投げかけられる困難な状況下、自分の存在を認識し積極的に受け入れて初めて手に入れられるものであったことも、念頭に置いておく必要があるだろう。

また、このような試みを通して、主人公 Rinko と多くの部分を共有していると考えられる作者 Yoshiko Uchida の文学テクストに対して積極的な評価を行ってゆきたい。そして、日本人である我々読者が、日系アメリカ人作家の文学テクストを読むときにどのような<sup>スタンス</sup>姿勢(stance)で臨めばよいのか、考えてゆきたい。

## II

### (1) *A Jar of Dreams*<sup>5)</sup> の概要

時代は大恐慌の後 1930 年代。主に舞台になっている場所は米国カリフォルニア州パークレー。11 歳の日系二世少女 Rinko Tsujimura は、Papa, Mama, 兄 Cal (California), 弟 Joji と一緒につつましいながらも愛情に満ちあふれた生活を送っている。Papa は理髪店を営み、Mama は週に一度、白人女性 Mrs. Phillips の家の家事の手伝いをして生計を立てている。Papa の理髪店の近くには、Papa の親友 Uncle Kanda の洋服の仕立て屋がある。彼は、Papa と同じ船で日本から来て以来の親友で、毎日曜日、決まって Rinko の家にやって来て夕食を共にする。Rinko は白人ばかりが住む地域の学校に通い、そこで白人の男の子たちからは“Jap”とからかわれ、一部の白人の女の子たちからはまるで透明なガラス板を見るかのように彼女の存在は無視されている。そのため、Rinko は自分の直毛の黒髪、日本人の顔、誰も覚えてくれず発音さえできない日本人の名前を持っていることに嫌気がさしている。彼女は「そして、何よりただ自分がみんなと同じになればよいのに」(“And more than anything, I wish I could just be like everybody else.”<sup>6)</sup>) と願っている。そんな中で、同じ日系二世の少女 Tami Nukaga は、Rinko にとって唯一信頼できる友だちである。Papa の夢は、借金を払い終えたら理髪店をやめ、自動車修理工場を開くことで、常々、子供たちには大きな夢を持つことを決して恐れるなど言っている。大学生の Cal は大学を卒業してエンジニアになることを夢見てきたが、たとえ大学を出ても日系人を雇ってくれる会社はないだろうと考え、厳しい現実にはすっかり悲観してしまっている。将来、大学を出て教師になろうという夢を持っている Rinko は、Cal からカリフォルニアの公立学校は日系人を教師として雇わないということを聞かされ、その夢をあきらめようかと思う。ある日、Tsujimura 家に Aunt Waka から一通の手紙が来る。Aunt Waka は Mama の妹で、東京に Grandpa と Grandma と一緒に住み、縫い物をして家計を助けたり、Grandpa の薬局で手伝いをしたりしている。手紙によると、Aunt Waka は 6 月 15 日に船でアメリカに着き、夏の間中、Tsujimura 家に滞在する予定だとある。実際のところ、Rinko は、Aunt Waka が泣いてばかりいる暗い人間ではないかと思い、そんな彼女が自分の家に来ることをあまり歓迎していなかったのである。(I)

Aunt Waka が家に来るとなると、Rinko はやんちゃな弟 Joji やその愛犬 Maxwell と一緒に部屋に寝なければならなくなり、そのことにあまりいい気はしていない。Rinko は自分が大学に行くための費用として「<大学に行くための>瓶」(“going to college” jar) に小銭を貯めている。隣に住んでいる白人の婦人 Mrs. Sugar (Sugarman) は、Rinko にとっては気の合う話し相手彼女の家と一緒に紅茶やココアを飲み、手作りのケーキやクッキーを食べながら一日中話をするのが好きである。(II)

Mama は Aunt Waka が来るという知らせに大いに喜ぶ。食事の前のお祈りを欠かさないのももちろんのこと、毎夜寝る前に寝室で膝まづき神と話をするほど敬虔なクリスチャンである Mama は、その日の夕食前には Aunt Waka が無事に着くことをひときわ長々と祈る。そんな中、

借金の支払いが滞り Papa が困っているということがわかる。それを知った Mama は苦しい家計を助けるため、自宅で洗濯屋を開きたいと申し出、Papa もそれに賛成し、洗濯屋を開くことが決まる。(Ⅲ)

Rinko は Mama が洗濯屋を開く一件をすぐさま Mrs. Sugar に報告しに行き、ついでに Aunt Waka が来ることも話す。Mrs. Sugar は、自分の家の地下室にある壊れて使えなくなった洗濯機を、修理可能であれば Mama の洗濯屋で使ってもらってもよいと言ってくれる。Papa はその洗濯機を家に持ち帰り修理して Mama の洗濯屋で使えるようにする。家族みんなで洗濯屋開店の準備をしているとき、偶然、地下室で Mama の思い出が詰まったトランクが見つかり、Mama は Rinko に昔の写真を見せながら、その当時の思い出を語る。そんな思い出話から、Aunt Waka は生まれつき少し足が悪いこと、Mama は学生時代、教師になりたかったことなどがわかる。Mama が Rinko に教師になってもらいたがっているのは、自分の娘に自分が果たせなかった夢を託しているのかもしれないと Rinko はひそかに思う。(Ⅳ)

Aunt Waka がやって来る週、自分の学費を稼ぐために、Cal は果実の収穫作業をしにストックトン (Stockton) の農場へ行く。Rinko は、寂しくなり親友の Tami に電話をし、Aunt Waka のことについて話すと、独身者と見ると何としてもその結婚相手を探し結びつけたがる世話好きの Tami の母親が、独身の Uncle Kanda と Aunt Waka をきつと結びつけたがるだろうと Tami は言う。Mama は Aunt Waka を迎えるにあたって日本式のごちそうを作り、家の中をきれいに掃除する。そして、家族みんな、Papa の愛車に乗り、サンフランシスコ (San Francisco) 港に、Aunt Waka を出迎えに行く。(Ⅴ)

船から降りて来た Aunt Waka は青い着物を着、小さな包みを持ち、これまでよほど苦勞してきたらしく年齢のわりに白髪が目立っている。Aunt Waka は家族全員に彼女自身からあるいは Grandpa と Grandma からの土産を持って来る。家に帰ると、Aunt Waka を歓迎しに Mrs. Sugar, Tami と彼女の母親、Uncle Kanda らがこぞってやって来る。みんなが帰った後、Rinko は、Aunt Waka が自分の部屋でこっそりと、死んだ夫と子供の位牌と写真を出し、線香を焚き、自分の船旅の無事を感謝して拝んでいる姿を見る。(Ⅵ)

Aunt Waka が着いた次の週、一通の脅迫状が Tsujimura 家に届く。その脅迫状は、他人の営業区域で洗濯屋をするのをやめろ、さもないと後悔するぞという内容であった。Papa は単なる冗談だろうとそれを気にも留めなかったが、その2、3日後、彼の車のタイヤが全部パンクさせられる。それだけでなく、顧客から出された洗濯物の束が盗まれ、なおかつ顧客の住所を探るように Starr Laundry のトラックが Papa の車をずっとつけて来たことから、それら全てが商売敵である彼らの仕業ということが明らかになる。(Ⅶ)

Rinko は、Starr Laundry の卑劣なやり方について Cal に手紙を書くと、数日後、彼から次の土曜日に帰るという返事が届く。Cal の帰りを、家の掃除をしたり、ごちそうを作ったりし首を長くして、家族のみんなが待っている。たくましくなって帰って来た Cal を Uncle Kanda, Aunt Waka と家族みんなが温かく迎える。みんな幸せな気分になっているとき、Cal が自分は大学を中

退して働こうと思っていると告白し、それを思い留まるように Uncle Kanda, Aunt Waka, Papa が説得する。(Ⅷ)

夜中、家の警備をさせられていた Joji の愛犬 Maxwell が、何者かによって銃で撃ち殺される。Joji は、そのことで非常に傷つく。騒ぎに驚き、外の様子を見に来た Mrs. Sugar をはじめ他の人々も Joji とその愛犬に同情する。殺された犬を裏庭に手厚く埋葬した後、Mrs. Sugar をまじえ、家族全員でこれからのことを話し合う。Mrs. Sugar と Cal はこのことを警察に知らせた方がよいと言うが、それは得策ではないと Papa は答える。Papa は 1918 年に日系移民が初めてアメリカに来たときに受けたひどい仕打ちについて話をし、どんなことがあってもあきらめたらいけないと力説する。また、Aunt Waka はいつもとは違う凜とした調子で、Starr Laundry の経営者 Wilbur Starr に直談判をしに行くべきだと主張する。その主張にみんなが賛同し、結局、次の日、Papa がこの件に関して Uncle Kanda のところへ相談しに行くことになる。(Ⅸ)

Uncle Kanda に相談した結果、Papa は、次の日の朝、Starr Laundry に Uncle Kanda と一緒に話をしに行くことを決意する。その朝、Papa と Uncle Kanda は、Starr Laundry に出向き、日系人に対して偏見と憎しみを抱いている Wilbur Starr と堂々と渡り合う。その様子を現場に隠れ、こっそり盗み見ていた Rinko と Joji は、ちょっとした拍子に大きな音を立てて倒れて見つかってしまい、Wilbur Starr から罵声を浴びせられ殴られそうになる。それを Papa は勇敢に阻む。帰り際に今度こんなことをしたらただではすまないぞと Uncle Kanda から反対に脅しをかけられた Wilbur Starr は為す術も無く、只々圧倒され情けない表情をする。(Ⅹ)

家に帰った Rinko は Mama に Starr Laundry であったことを話すと、Mama は Papa と Uncle Kanda の勇敢さに驚くのと同時に、黙って彼らについて行った Rinko をしかる。この事件の後、Rinko 自身、自分が変わり、そして成長していることを感じる。それで彼女はその日以降、ふつう歴史を B. C. と A. D. で分けるように、彼女の頭の中では自分の人生を B. W. S. (Before Wilbur Starr) と A. W. S. (After Wilbur Starr) というように分けるようになる。日曜の夜、いつものように Uncle Kanda も夕食の席に来る。その席で Papa は、理髪店をやめ、長年の夢だった自動車修理工場を開きたいと言い出す。Aunt Waka はそれを励まし、Uncle Kanda は長年こつこつ貯めてきて肌身離さず持ち歩いている貯金を Papa の自動車修理工場に投資したいと言い、Papa をいたく感激させる。同時に、けちだという噂があった Uncle Kanda に対する Rinko の印象もすっかり変わる。(Ⅺ)

Papa は家のガレージをきれいにして、そこに自動車修理工場を開く準備を始める。Mrs. Sugar がその最初のお客さんになってくれる。ある日曜日、Mama は Aunt Waka にゴールデン・ゲート・パーク (Golden Gate Park) などの観光名所を見せるため、家族そろってサンフランシスコに行くときに、一緒に来るように Uncle Kanda を誘おうとするが、彼は誰にも知らせずに町を出、行方知れずの状態になっている。みんな不思議に思う中、Rinko は彼の代わりに Tami を呼ぶことを提案し、受け入れられる。Tami は、Aunt Waka に Uncle Kanda と結婚して一生アメリカに居たくないかと尋ねる。それに対して、Aunt Waka はいつも自分が外国人として見られ、

嫌われ、他の人々より蔑んで見られるような国には住みたくないときっぱりとした調子で答える。その日の夜中、病院から電話があり、Uncle Kanda がバス停近くで車にはねられて入院していることがわかる。どうやら彼は、Cal が大学を中退しないように説得しに行ったようである。(XII)

Papa の懸命な看病や Mama の必死のお祈りの甲斐あってか、まる 2 日間、意識不明だった Uncle Kanda によろやく 3 日目、意識が戻る。そうするとすぐ、彼はみんなに Cal からの手紙を見せる。それは、Cal は思い直し、エンジニアになることを目指し大学に戻ることにしたという内容である。みんなは、そのことに胸を撫で下ろし、Uncle Kanda に感謝する。ある日、Uncle Kanda が Rinko に会いたいと言っているというので、当惑しながら彼女は彼に会いに病院へ行く。すると彼は、Rinko に教師になろうという自分の夢を決してあきらめるなど伝えてくれと Cal から頼まれたと言い、彼女はそうする決意をする。家に戻った彼女はみんなにそのことを話し、みんなは彼女の決意を喜ばしく思う。(XIII)

日本へ帰る日が近まってきたある日曜日の夜、Aunt Waka は、Rinko の着物姿を写真に撮り、日本にいる Grandpa, Grandma に見せたいと言い、Rinko に自分があげた着物をすぐに着るように頼む。あまり乗り気ではない様子で、着物を着せてもらった Rinko は鏡に映った自分の姿を見、それが自分ではないような気がする。その一方、Papa, Mama, Aunt Waka は、着物姿の Rinko を大喜びで写真に撮る。着物を早く脱ぎたくてたまらない Rinko に、Aunt Waka は彼女が日系人であるために、他の人と違って見えても、自分自身の価値を信じ、日系人であることを誇りに思っていて欲しいと言う。Aunt Waka は日本に帰る前に、退院し自宅で療養中の Uncle Kanda や、Tami や彼女の母親にお別れの言葉を言いに行く。Mrs. Sugar は、Aunt Waka が帰る前夜、自宅で彼女のお別れ会を開き、手作りのお土産までくれる。いよいよ出発の日、Grandpa や Grandma へのお土産ですっかり重くなってしまった荷物を持った Aunt Waka を家族みんなでサンフランシスコ港まで見送りに行き、互いに再会を固く誓いつつ涙の別れをする。Rinko は Aunt Waka を見送りながら、たとえ他人と違って、自分が日系人であることに誇りを持つべきだという彼女の教えを守ろうとあらためて心に誓う。そして、Rinko は今年の夏がこれまでの自分の人生の中で最高の夏であったことを実感し、自分の意識を変えてくれた Aunt Waka の存在の大きさに気づく。(XIV)

## (2) Rinko のアイデンティティの萌芽

この物語の中で Rinko が自分で最も気にし、彼女の劣等感の根源になっていると思われることは、自分が他の人（白人）と違っているということである。学校や地域社会において、「ここから出て行け、いまいまいしい日本人のガキどもめ」(“Get outta here you damn Jap kids” 5) などと罵声を浴びせられたり、その存在を完全に無視されたりする理由を、彼女自身、自分が日系人であるために他のアメリカ人（白人）とは違った容姿、違った食生活、違った風習を持っているからだとして認識しているようである。

事実、Rinko は自分の黒くて直毛の髪や小さい目や小柄で痩せた体に対して強い嫌悪感を持っ

ている。また、彼女はおにぎりやみそ汁のような日本的な食べ物よりも、ケーキやクッキーやパンのようなアメリカ的な食べ物の方が好きである。独特の匂いがする漬物（たくわん）を持ってバスに乗ったために他の客から迷惑がられた体験や風呂敷包みを持っていて人にじろじろ見られた体験から、たとえ最愛の Mama からのお願いであっても、彼女はそれらのものを持ち歩くことを断固拒否する。Aunt Waka からの贈り物の着物でさえ、Rinko は着ることを望まず、日本へ帰る日間近に Aunt Waka から頼まれたのでしかたなくそうするが、それでも着物を着た自分の姿を見て「それは自分じゃない」（“That’s not me” 121）とさえ言うのである。学校で PTA の会があっても、もし Mama が出席したら、先生たちにぺこぺこお辞儀をしたり変な英語を話したり、おそらく Rinko 自身と同じように他の人々から無視されるだろうから来てもらいたくないと思い、その会の知らせを Mama に渡そうとしない。そして、そのことで、彼女は Mama のことを恥じているというより、そんなことを恥じる自分を恥じている自分自身に気がついている。

しかし、他人と違うことを恥じている Rinko に日本からやって来た Aunt Waka が変化をもたらす。Aunt Wakaこそ、日系二世 Rinko に日本人としてのもう一つの自分を教えてくれたのである。Aunt Waka は日本人としての誇りを持ち、日本女性としてのしとやかさを持ちながらも、自分の考えをしっかりと持っている。Mama が洗濯屋を始めるにあたって、商売敵で人種差別主義者の Wilbur Starr から度重なるひどいやがらせを受けたとき、立ち上がって断固抗議すべきだと主張したのは、他ならぬ Aunt Waka であるし、Cal が大学をやめようと思っているのを知り、誰にも知らせず突然、彼に思い留まるよう説得に行った Uncle Kanda を一番冷静に見守ったのも彼女である。Aunt Waka は、Rinko に日本女性の素晴らしさを身をもって示し、日本人の血を引く者として誇りを持って生きてゆくべきことを教えてくれたのである。同時に、Aunt Waka は、アメリカという「異国」にやって来て差別に耐え困難に立ち向かいながらたくましく生きている Papa、Mama は自分よりももっと強くて立派であることを Rinko に力説する。

日系二世 Rinko は、自分たち日系人を差別する白人が日系人である Papa と Uncle Kanda にやられるのを見て痛快に思い、日本人 Aunt Waka に対して尊敬と憧れの気持ちを持つようになる。この物語での Rinko の姿を端的に言うなら、日系人としてのアイデンティティを脅かす存在（人種差別主義者の白人たち）を否定する一方、その対局にある日本から来た日本人（Aunt Waka）を完全に肯定することで自分のアイデンティティを懸命に模索しようとしている姿と言えよう。

Rinko はこのひと夏の経験を通して、他人と違うことは少しも恥ずべきことではないということを知る。そして、彼女は、これからの人生、自分自身の身体に流れる日本人の血を誇りに思い、日系人としての自覚を持って、決して自分の夢を捨てずにしっかりと生きてゆこうと決意する。Rinko が自分自身、Aunt Waka が来る前と来た後の自分を“Before Aunt Waka,” “After Aunt Waka” と区別しているように、明らかに Aunt Waka が来た後の彼女は人間的な成長を遂げ、日系人としてのアイデンティティを芽生えさせていると言うことができる。

### III

#### (1) *The Best Bad Thing*<sup>6)</sup> の概要

物語の舞台となっている場所、時、人物設定などから見て、この作品は前作 *A Jar of Dreams* の続編と考えられる。

ある日曜日、Rinko はイースト・オークランド (East Oakland) に住んでいる、Mama と同郷の親友 Mrs. Hata のところへ、彼女の夫 Mr. Hata の 49 日忌法要にと Mama が作った手製の料理を持って家族そろって行かなければならなくなる。その日、Rinko は親友 Tami と映画を見に行くつもりだったので、そうしたくない。その上、Mrs. Hata には少し気が狂っているという噂があり、そのことが、ますます Rinko の行く気をそいでいる。アラスカ (Alaska) のサケ (salmon) の缶詰工場にアルバイトをしに行き、家にいない Cal を除き、家族みんなで Papa の愛車に乗り、Mrs. Hata の家に向かう。みすばらしい様子の納屋の近くにそれと同じくらいみすばらしい家があり、その向こうに見えるキュウリが栽培されている畑で、腰を悪くしている Mrs. Hata と、二人の幼い男の子供 Zenny と Abu が畑仕事をしているのが見える。(I)

Mama の手料理をみんなで食べた後、夕食時まで畑でキュウリを摘み採る作業を手伝う。くたくたになって家に帰り簡単な夕食を摂った後、Mama は Rinko に Mrs. Hata のところに夏休みの間 1 か月ほどいて、手伝いをするように言われる。電話も電気もない Mrs. Hata の家に行くのを嫌がっている Rinko を、困っている人を助けるのは「キリスト教信者のつとめ」(Christian duty) なので、是非とも行くように Papa も Mama も彼女を説得する。その説得に負け、彼女は嫌になったら 2 週間で帰って来てよという条件で渋々承諾する。水曜日の朝早く、Rinko は Papa の車で Mrs. Hata のところへ向かう。(II)

Papa の車が Mrs. Hata の家に着く。ちょうどそのとき、Mrs. Hata と二人の息子は、収穫したキュウリを工場に運ぶためトラックに積み終わったところであった。Papa にお別れの言葉を言う暇もなく、Rinko は、Mrs. Hata が運転するトラックに乗せられ一緒に連れて行かれる。Rinko は、Mrs. Hata に彼女がトラックの運転をできるようになったいきさつを訊くと、夫が結核を悪化させロサンゼルスに療養に行ってしまったから必要に迫られ運転を覚えたと答える。工場で荷を下ろして家に帰る途中、Rinko は、家の前に広がる草原に Mr. Hata や赤ん坊のときに病気で死んだ二人の娘の霊がときどきやって来るという話を Zenny から聞く。(III)

Mrs. Hata (以降 Auntie Hata と呼ばれるようになる) の家に帰って来て、家の中を案内された Rinko は、その異様さに驚く。その家は、人が歩くとたびたびキーキー音をたてるほど古く、傾きかけていて、そこには敷物、電灯、電話、ラジオ、冷蔵庫などが無いばかりか、何と時計さえないのである。さらに驚くべきことに、その家にはバスタブ (bathtub) がなく、その代わりにドラム缶を使い、屋外や台所で風呂にしていることがわかる。星空の下、見た目より快適なその風呂に入っていた Rinko は、近くを通り過ぎた何者かの足音に驚き慌てて外に出る。彼女がその足音のことを Mrs. Hata に話すと、それは彼女の家の納屋に住み、七番通り (Seventh Street) のイーグル

カフェ (The Eagle Cafe) というレストランでコックをしている Mr. Yamanaka という老人だと Mrs. Hata は教えてくれる。そんなこんなで早くも、Rinko は自分の家が恋しくなる。(Ⅳ)

次の日曜日、Rinko は朝早く起こされ、日本式の朝食を Auntie Hata たちと一緒に食べさせられる。Auntie Hata には、朝食に潰しニンニクをごはんの上に乗せて食べたり、話が急に飛んだり、何か言う前に少し口ごもってしまったりするという変わったところがあるので、やはり彼女は少し気が狂っているのではないかと Rinko は思う。また、Auntie Hata には、若いころ、経済的事情から夫婦二人で畑仕事をしなければならず、世話ができなくてやむをえず日本にいる祖父母のところに預けた Teru という 19 歳の娘がいることがわかる。Zenny と Abu が薪を拾いに行くのについて行った Rinko は、彼らが拾った薪を横取りしようとする大男に襲われるが、Mr. Yamanaka が柔道技でその男を投げて追い払ってくれる。Rinko は彼に礼を言うが、彼は無口で無表情のままである。(Ⅴ)

Mr. Yamanaka から自分が無視されていることに気づいた Rinko は、その理由を知りたいと思う。彼は、心配をかけたらいけないので Auntie Hata にはさっきの事件のことを言わないように、Rinko たちに言う。家に帰る途中、走っている貨物列車に飛び乗り、そしてその後飛び降りるという遊びを Zenny たちに教わり、Rinko も試みるが、飛び降りるときにタイミングを間違え、足首をねんざしてしまう。そして、どうしたらよいか途方に暮れた三人は結局、Rinko の怪我を治してもらいに Mr. Yamanaka の納屋を訪ねる。(Ⅵ)

驚いたことに Mr. Yamanaka の納屋は色とりどりの凧 (kite) で一杯の意外にも綺麗なところである。Rinko たちが訪ねたときも彼は懸命に凧を作っている最中である。彼は、凧作りの合間をぬって、Rinko のねんざした足首を診、それに茶の葉っぱで湿布をしてくれる。ここで初めて二人は会話らしい会話を交わす。Rinko が自分のことや家族のことを話すと、Mr. Yamanaka は自分の存在を Papa と Mama 以外誰にも教えてはいけないと言うが、Rinko にはどうして彼がそんなことを言うのか理解できない。(Ⅶ)

Rinko は悪いことは三つ一緒に起こると言う Mama の言葉を思い出し、自分の足首のねんざ以外にも何か悪いことが起こるに違いないと思う。Rinko は、自分がしたことを正直に Auntie Hata に言うが、思ったほどは怒られずにすむ。夕食の準備ができたので、Rinko が Zenny と Abu を呼びに行ったら、彼らはまた線路を走ってくる列車に飛び乗り、飛び降りる遊びをしている。Zenny はうまく飛び降りることができたが、Abu は飛び降りるタイミングを失敗し、飛び降りた拍子に転び、走っている列車の車輪に右腕を巻き込まれて大怪我を負ってしまう。(Ⅷ)

大怪我をした Abu のところに Auntie Hata はすぐに駆けつけ、彼をトラックに乗せ病院に運ぼうとする。数時間にも及ぶ手術の後、医者は Abu の右腕は体についてはいるが、感覚を失ってしまうかもしれないと言う。Auntie Hata は Abu の看病をするため、自分は病院に残るが、Rinko と Zenny は電車で Mr. Yamanaka の勤めるレストランに行き、彼に家まで連れて行ってもらうように言う。レストランに着いた二人は、彼に事情を話し、そこで出された食べ物を食べながら、彼の仕事が終わるのを待つ。仕事が終わって、三人一緒に家に帰り、Auntie Hata の帰りを待つ

いと、只事ではないことが一見してわかるほど青ざめた顔をした彼女が帰って来る。なんと、病院の入口付近に止めていたはずのトラックが盗まれたというのである。(IX)

次の日、RinkoがPapaとMamaに電話したらすぐに、二人は牧師のReverend Mitakaを伴ってAbuの入院する病院にやって来た。みんなで病床のAbuを元気づけようとし、Rinkoは自分が飼っている亀のHerbertを彼に持って来てやると約束する。MamaとPapaから、もうHata家に行ってから2週間が過ぎたが家に帰るかどうか訊かれ、Rinkoはし残した仕事があるのでここに残ると言う。実を言うと彼女がそうしようと思った本当の理由は、彼女がAuntie Hataのことを好きになったからである。その後、Auntie Hataは毎日、朝から夜遅くまでAbuの看病で病院にいて家に帰って来ない。畑のキュウリも熟してきて収穫する時期になったが、盗まれたトラックが戻って来ないので工場に運べない。やむをえず、RinkoはZennyと一緒にキュウリを路上で売ろうとするが失敗してしまう。土曜日にPapaが代わって工場にキュウリを運ぼうとするが、収穫したキュウリは熟のため腐りかけていて売り物にならないことがわかり、全て徒労に終わる。だんだん、誰もキュウリ畑に手をかけなくなり、せつかくのキュウリ畑がだいなしになる。ある夜、夕食後、Mr. Yamanakaが、サムライの絵が描かれている菱形の凧をZennyに、黄色と黒に彩られた蝶の形の凧をRinkoに持って来る。そして、その後三人でした凧揚げを通じて、彼とRinkoは心を通わせ合うようになる。(X)

次の日の朝、Auntie Hataが病院に行く前、Mrs. Saundersと名乗る、ネービーブルーのスーツを着、ブリーフケースを持ったブロンドで長身の白人女性が車でHata家にやって来た。彼女は、病院でHata家の事情を聞きつけた郡の福祉事務所から派遣されて来たのである。彼女は、Auntie Hataにどれくらいの収入があるか、どのようにして家賃を払い、子どもを育てているかなど込み入った質問をする。けれども、Auntie Hataはそんな複雑なことを英語で答えるのに苦労し、Rinkoの助けを借りる。Mrs. Saundersは、家の中を見て回り、バスタブがないことに驚き注意する。Rinkoは、Auntie Hataが病院に行くのが遅れてしまった責任をMrs. Saundersにとらせて、彼女に車でAuntie Hataを病院まで送らせる。(XI)

ある日の夕食時、Auntie HataはMrs. Saundersからダウントウンのバスタブ付きの家に引っ越すように言われていて、それに従わざるをえないだろうと言う。Rinkoは、このことをMr. Yamanakaのところに相談しに行く。しばらくして、Zennyも彼にこのことを話しにやって来る。このことを聞くと、彼は恐れた様子で、絶対に他言はしないという条件で自分の素姓を語り始める。彼は、17歳のとき畑仕事に嫌気がさして家を飛び出、横浜で貨物船にコックとして乗り込んだが、地球を二周もしたところでサンフランシスコ港に停泊中の船から逃げ出し、入国手続きもしないで「黄金の国」(“golden land”)アメリカに入国し、そこでお金を稼ぎ、金持ちになって故国に帰ることを夢見てきた。しかし、その夢は未だ実現されることなく、その後ユタの銅山で鉱夫として10年働いた末に腰を悪くしてくびにされ、カリフォルニアの農場でしばらく働いた後、現在働いているレストランで働くようになったということである。彼は正規の入国手続きをしておらず、それが当局に知れば強制送還されてしまうかもしれない。それゆえ、常に彼は他人に

対して警戒し、よそよそしくふるまっていたのである。Rinko は、彼が最初、自分を無視しているように感じた訳がやっとわかったような気がする。(XII)

ある夜、Auntie Hata は白い着物を着、亡き夫の遺影に、これからどうしたらよいか訊いている。それを立ち聞きしていた Rinko は、生活保護を受けるのはやめと、まるで亡くなった Mr. Hata の霊が彼女に乗り移ってそうさせたかのように思わず叫んでしまう。Auntie Hata はそんな Rinko に元気づけられる。ある日、Rinko は、今日の日曜日に Abu が家に帰れるようになったことを Mr. Yamanaka に知らせに行くと、そこにはもはや彼の姿はない。枕もとに Auntie Hata 宛の置き手紙があるのを見つけた Rinko は、それを Auntie Hata のところへ急いで持ち帰る。その手紙には、自分は金持ちになって日本に帰るといふ夢を捨てるが、その代わり、これまでのようにびくびくして暮らすこともやめ、威厳を持って日本に帰ること、みんなにお別れの言葉を言うのが嫌なので朝早く出て行くこと、Auntie Hata には生活保護なんか受けなくて誇りと魂を失うことなく強く生きて欲しいこと、彼の風は全て男の子たちにあげるが、蝶の形をしたものは Rinko にあげることに、そしてその風を揚げて自分のことを思い出して欲しいことなどが書かれていた。彼が行ってしまったことを悪いことだと嘆く Rinko に、Auntie Hata は、それは彼にとってはよいことで、たとえ悪いことのように思えても実はよいことだったということもあると教えてくれる。(XIII)

Mr. Yamanaka が去った翌朝、Mrs. Saunders が再び Hata 家にやって来る。彼女から、Auntie Hata は生活保護を受けてダウンタウンのバスタブ付きの家に移すという書類にサインさせられそうになるが、Auntie Hata は夫が自分に自力で家族を養うように言っていると言い、断固それを拒否する。その様子にさすがの Mrs. Saunders もあきれかえり、諦めて帰って行く。日曜日、Papa は退院した Abu を車に乗せ病院から連れて来る。Mama, Joji, Auntie Hata も一緒である。Abu は右腕を吊り包帯で吊り、顔色は青白かったが、思ったより元気そうに見える。食事をすませた後、Rinko は Papa と Mama に Mrs. Saunders の一件を言おうとするが、Papa は Reverend Mitaka から全て聞いて知っているようである。そして、Papa は Auntie Hata に日本人教会の独身寮の寮母の職を紹介する。彼女は Papa の心づかいに感謝し、喜んでその職に就きたいと言う。そして、いよいよ Rinko が Auntie Hata の家から去らねばならないときが来る。Auntie Hata と再会を約束し、いろいろなことを学ばせてもらったお礼を言い、Rinko はその家を去る。Papa の車で家に帰る道、Rinko は自分にとっての「一番よい悪いこと」(“the best bad thing”) は Auntie Hata の家に行ったことなのだと気づく。(XIV)

## (2) Rinko のアイデンティティの形成

この作品中、Rinko は、日系二世としての自分に対してしばしば不満を表している。確かにその不満は自分の小さくて細い目、痩せて小柄な体といった容姿から日本的な名前にまで及んでいる。しかしながら、前作 *A Jar of Dreams* の中で彼女があらわにしていたほどの強い嫌悪感を感じられない。事実、この作品の中で彼女が日系人としての自分自身の存在に不満を言う箇所の数

は前作に比べて明らかに減っている。

前作 *A Jar of Dreams* における主要な事件は、商売敵で人種差別主義者の白人 Wilbur Starr が Mama の洗濯屋の商売を妨害してくるのに対し、Papa と日系人の仲間 Uncle Kanda や日本人 Aunt Waka が力を合わせ断固として戦うというものだった。一方、*The Best Bad Thing* における主要な事件は、少し気が狂っているという噂がある未亡人 Auntie Hata の家という、電気も電話も時計もラジオもない世間から完全に閉ざされたところで、Rinko が生まれて初めて長い期間自分の家を離れて暮らすというものである。確かに、この作品にはわき筋 (subplot) として Abu の大怪我、Auntie Hata のトラックの盗難、Mr. Yamanaka の謎めいた過去とその開示、Hata 家と福祉事務所員 Mrs. Saunders との生活保護をめぐるやりとりなどがあるが、この物語の最後の部分で Rinko 自身、自分が Hata 家に行ったことを「それは、今までわたしに起こったことのうち一番よい悪いことだったわ」(“It was the best bad thing that ever happened to me” 120) と言っているように、それらの事件も初めて長い期間自分の家を離れた Rinko の Hata 家での体験に比べれば、わき筋でしかない。

この物語で Rinko は Auntie Hata から日系人としてのアイデンティティに関わることは教えられない。前作で Rinko が Aunt Waka から日本人の血を誇りに思っ生きてゆくように教えられたのとは対照的である。Mr. Yamanaka も自分がアメリカに来たときのつらい経験を語り、彼自身、アメリカで一獲千金という夢に破れながらも誇りを持って日本に帰って行くが、Rinko にそのようなことは何も教えてくれない。ただ、Rinko は、これからどんなに貧しくても生活保護を受けることなく人間として誇りを持って生きてゆく決心をする Auntie Hata を本当に立派だと思いい、また、アメリカに移民として来た当初のつらい体験に耐え、生き抜いてきた Mr. Yamanaka の姿には Papa の姿を重ね合わせ、彼らをはじめ日系移民に対して尊敬の念を持つようになるのである。

この物語における Rinko の物事に対する態度は、前作に見られるような、他人から教えを受けるとい受動的態度から、自分の体験から自ら学ぶ能動的態度に変化している。そして、彼女は日系二世としての自分を卑下することも少なくなり、差別されても以前ほど気にしない強さを身につけている。彼女は自分自身の存在を認識し、まだ完全ではなく、壊れやすいものではあるが、自らのアイデンティティを積極的に形成し始めているのである。

#### IV

##### (1) *The Happiest Ending*<sup>7)</sup> の概要

物語の舞台になっている場所、時、人物設定などから見て、この作品は、前 2 作品 *A Jar of Dreams*, *The Best Bad Thing* の続編と考えられる。

ある土曜日の午後、自分たちの文化遺産 (heritage) として日本語を子供たちに学ばせようと

いう考えから、Mama は、体が弱くて毎日放課後の日本語の授業に出られない娘 Rinko を日本語の個人授業を受けさせるために自分の友人 Mrs. S. (Sugino) のところにやる。いやいやながら、Rinko は Mrs. S. の家に行く。彼女の家はオークランドのチャイナタウンの端にあり、ビクトリア朝 (Victorian) 様式の大きな二階建の家である。Rinko がその家を訪ねると相撲取りの人形を思わせる Boku と呼ばれる固太りの男の子が出て来る。彼女が家の中を見回すと、Mrs. S. は何でも物を捨てずに取っておく人と見えて、数多くの古雑誌やカード類が雑然と置いてある。しばらくして、Mrs. S. が姿を現す。(I)

Mrs. S. は Mama とほぼ同じ年齢の 38 歳くらいで、美しいすうっとした顔立ちをしている。彼女は自分の息子 Boku の本当の名前は Kanzaburo だと教えてくれる。いよいよ、日本語の個人授業が始まり、邪魔な Boku は小雨の中、外に遊びに行かされる。まもなく外にいる Boku の呼び声を聞き、急いで外に出ようとした Mrs. S. は入り口の階段で足を滑らせて転び手首に怪我を負ってしまう。Rinko は電話で Dr. Kita を呼ぼうとするが、つの縁眼鏡をかけ、濃い髪をオールバックにしたセントバーナード犬似の男の人が現れ、Mrs. S. をお医者さんのところへ連れて行ってくれる。その男の人は Mr. Kinjo と呼ばれ、Mrs. S. のところに寄宿している三人のうちの一人で、なぜか Rinko の名前を知っている。(II)

Rinko が家に電話して Mrs. S. の怪我のことを話すと、そこに残って彼女の手伝いをするように Mama から言われる。いたずら好きの Boku の相手をするのにうんざりしながら、Boku の案内で家の二階に上り、Mr. Higa という寄宿者が住んでいる暗い霧囲気の部屋の中を見る。階下の台所で物音がするので戻ると、Rinko たちは、若くて格好のよい日本人男性 Johnny Junichi Ochi に会う。彼は Rinko の兄 Cal と大学で同級の、東京から来た留学生で、卒業してからアメリカに残るか、日本に戻るか決めかねているらしいが、彼の夢は俳優になることだという。Mrs. S. は Mr. Kinjo につき添われながら右腕を吊り包帯で吊って家に帰る。右腕を骨折し不自由な Mrs. S. の代わりに Rinko が夕食の準備をし、その日の夕食を彼らと共にすることになる。そこでの会話から Mr. Kinjo が Rinko のことを知っているのは、以前彼が日本人教会の独身寮にいて、そこで寮母をしている Auntie Hata から彼女の噂話をよく聞かされていたからだとわかる。みんなで夕食を食べ始めてからしばらくすると、Mr. Higa が帰って来る。(III)

現れた Mr. Higa は暗い表情をした白髪頭の中年の男性で Rinko は彼に Mr. Sad Higa とあだ名をつける。Mr. Kinjo は、その日 Auntie Hata の娘で日本に住んでいる Teru との結婚式の日取りを Auntie Hata と話し合っただけで決めて来たことを嬉しそうに発表する。みんな乾杯し合っただけのことを祝福するが、Rinko は、19 歳の Teru に対して Mr. Kinjo は齢を取り過ぎていて似合わないと言ってしまう、その場の霧囲気を気まずくする。Mr. Higa も祝福するが Teru が来る 12 月には自分も貯金をはたき、17 年ぶりに妻と子供がいる日本に帰るつもりだと話す。(IV)

Rinko は気まずい霧囲気の中で、食事もう口に合わない。彼女は Mr. Kinjo に謝ろうかと思うが、それもできない。そんなとき、Papa が彼女を連れにやって来る。Papa は Mama からお土産を Mrs. S. に渡し、彼女の怪我のことを気づかった後、毎週土曜日、手伝いに Rinko をやりたい

と申し出る。急いで食器を片づけて来た Rinko は Papa の車に乗り家に帰る。家に帰ってから、Teru と Mr. Kinjo の結婚はおかしいと信じている Rinko は、それをやめさせる方法を親友 Tami に電話で相談したり、Mr. Hata の霊を呼び出して知ろうとするが全て徒労に終わる。(V)

次の土曜日、Rinko は Mrs. S. のところに日本語の授業を受けに行くことになっている。なんとか理由をつけて行くまいとする Rinko を Mama も Papa も相手にしない。彼女は思いあまって兄の Cal に Teru と Mr. Kinjo の結婚のことを相談するが、Teru は Mr. Kinjo と結婚の約束をし、アメリカに来る船賃を彼から貰っているので今さらそれを取りやめることはできないだろうし、他人の結婚などという問題に口を挟んではいけないと Cal から逆に説教される。しかたなく、Rinko は Mrs. S. のところへ行くふりをするが、その前に Auntie Hata に会いに教会の独身寮へ行くことにする。(VI)

独身寮にいる Auntie Hata に会いに行く途中、偶然、Rinko は、教会のチャペルの前で普段着の Reverend Mitaka に会い、日曜日に正装して説教壇にいるときより普段着姿の方がすてきだなどと失礼なことばかり言い、彼を当惑させる。それから、Rinko は独身寮に行き、Auntie Hata に会う。Auntie Hata は、娘 Teru と Mr. Kinjo の結婚のことを嬉しそうに話し、今夜、それを祝うパーティを開く予定だと言う。Teru の結婚相手にふさわしい、もっと若い男の人はいなかったのかと訊ねる Rinko に対し、Mr. Kinjo はいい人だし、まず第一に、若い人たちは自分で生活してゆくだけで精一杯で、家族を養うだけの経済力など持っているはずがなく、あの Mr. Kinjo だって今になってやっとそれができるようになったのだと Auntie Hata は答える。(VII)

感謝祭の一週間前、Mama は、腕の怪我がまだ回復していない Mrs. S. が感謝祭の料理を作るのは大変なので、家族みんなで彼女の家に行き、合同で感謝祭のパーティをしたらどうかと提案する。ガールフレンドの Susie のところで感謝祭を過ごしたいという Cal 以外はそれに賛成する。Rinko はあまりそれに乗り気ではなかったが、ハンサムな Johnny やまだ会ったことがない Mr. Sugino に会ってみたいと思い、パーティのとき Mr. Kinjo の隣に座らないでよいという条件でしぶしぶ了承する。(VIII)

感謝祭の日、Sugino 家に行くとき、Rinko と Mama は台所に行き、Mrs. S. の料理の手伝いをし、Papa と Joji は応接間に行き、その家の住人たちとゲームをしたり会話をしたりする。Mr. Kinjo と Johnny は将棋を差しながら真剣に他の話をしている。Johnny がいつまでも外国人としてアメリカに住んでいることに悲観的な意見を言うのに対し、Mr. Kinjo はいつかは自分たちもアメリカ人になれる日が来ると楽観的な意見を言う。Rinko はそのとき初めて Papa と話をしている Mr. Sugino を見かけるが、なぜだか彼を好きになれない。しばらくして、Mr. Kinjo が、Rinko のところにやって来て話をする。彼はお金を稼ぐために Mr. Higa の洗濯屋で夜、アルバイトをしていることや、将来、自分の花畑を持ってカーネーションやバラを栽培し誰も想像したことがないようなきれいな色の雑種を作ってこの国で成功したいという自分の夢や、自分は必ず Teru を幸せにしようと思っているという決意などを Rinko に語る。食事の後、Mr. Higa と Mr. Kinjo が演じる詩吟を上の方で聞きながら、近くにいる Johnny の王子様を連想させる格好

のよい姿を見て、Teru の結婚相手にふさわしいのは彼しかいないと Rinko は確信する。(IX)

Rinko は Johnny と Teru を結婚させるという自分の計画を Tami に相談すると、彼女から一刻も早くそのことを Johnny に言った方がよいと言われる。今度の金曜日、サンフランシスコ港に Teru を迎えに行こうと Rinko は提案するが、家族のみんなから、日曜日には会えるのだからなにもそこまでしなくてもよいと言われ、相手にされない。土曜日に Rinko が、Mrs. S. のところに日本語の授業を受けに行くと、Mrs. S. の様子が只事ではない。ついに感極まって Mrs. S. は授業中に突然泣き出し、夫にだまされたと言う。彼女は結婚のため日本からアメリカに来る前、夫が自分の写真と称して送ってきた実物よりも若くてハンサムな男性の写真に半ばだまされた形で、意に反して彼と結婚させられ、それ以来ずっと彼のことが信じられなくなっていたことを告白する。授業が終わり、Rinko は夕食の準備の手伝いをすることを申し出るが、Mrs. S. から断られる。(X)

日曜日、Rinko たちは一家そろって Teru に会うため、Auntie Hata の家へ行く。その家に着くと、Abu と Zenny は外で凧を揚げています。そこに、Auntie Hata と Teru が出迎えに来る。Teru は緑の正絹の着物を着ていて、さながら日本人形のようにきれいである。互いに丁寧な挨拶をした後、Papa が今日は Mr. Kinjo はいないのかと訊くと、Sugino 家で非常事態が起こっているので来れないと Auntie Hata は答え、その後何やら大人同士でひそひそ話を始める。夕食後、子供たちがみんな凧揚げをしに外に行く中、大人たちの会話を聞こうと一人家の中に残った Rinko を Teru は二階の自分の部屋に連れて行く。(XI)

Teru の部屋は、Rinko がこの前の夏に1か月過ごした部屋である。Rinko は Teru に彼女が幼いときに親元から離され、日本にいる祖父母のところにやられたことに関して母親を恨まなかったかと訊くと、彼女は確かにしばらくは母親を恨んでいたが、あるときいつも優しくしてくれた祖母から、自分の置かれた状況を受け入れて幸福に暮らした方がよいと言われて以来、自分の置かれた状況を受け入れるようになったと答える。そして、彼女は今こうして生れ故郷のアメリカに帰って来たのだからこれからはよいアメリカ人になりたいと言う。Rinko は思いきって、彼女に Mr. Kinjo との結婚は取りやめ、Johnny と結婚するように Teru にすすめるが、相手にしてもらえない。Rinko はそれに少々憤慨し、これからは Teru のことを構うのはやめにしようと決心する。(XII)

クリスマス休暇が始まる前日、Rinko は Tami に誘われてデパートに行き、Mama へのプレゼントのハンカチを探している。彼女はハンカチ売り場で、Tami から Mrs. S. の家で起こった非常事態のことを聞かされる。その話によると、Mr. Sugino は元来大酒飲みの上にギャンブル好きで、持っているお金を全て使い果たしてしまい Sugino 家の家計を破産状態にしてしまっただけでは飽き足らず、Mr. Higa が日本に帰るためにこつこつ貯めていたお金、50,000 ドルを二倍にしてやるからとうそぶいて持ち出し、ギャンブルで全部すってしまったという。家に帰ると Rinko は Mama から Mrs. S. のところに卵とパンを持って行くように言われる。これは好都合とばかり、Rinko は喜び勇んで、Sugino 家に行く。驚いたことに、その家の前の縁石のところには山のよう

に重ねられた多くの箱や古びたスーツケースや洋服が置き去りにされており、そんな中、Bokuが入口の前の階段に一人寂しく座っている。Rinkoが彼に何があったのか訊ねても、泣きわめくばかりである。(XIII)

泣き続けるBokuをRinkoは懸命に慰める。しばらくして、取り乱した様子のMrs. S.が現れ、とうとう夫を家から追い出し、彼の持ち物も全て捨ててしまったと言う。自分に何一つ隠すことなく語ってくれたMrs. S.に対して、自分が大人と同じように扱われていることを感じ、Rinkoは満足する。家の中に入ってRinkoとMrs. S.が二人で話をしているところにMr. KinjoがBokuへのお土産にポップコーンを買って来る。そしてこんなときに、Johnnyが有名な日本人俳優 Sessue Hayakawa に会いにハリウッド (Hollywood) へ行っていることをMr. Kinjoから聞かされ、RinkoはそんなJohnnyに失望する。Mrs. S.に言われて外にいるBokuを連れに行ったRinkoは、Bokuがどこかへ行ってしまったことに気づく。(XIV)

そのことを知ったMr. Kinjoは、慌ててBokuを捜しに行く。RinkoとMrs. S.は家の中を捜すが、見つからない。二人で手分けして、通りの店を一軒一軒しらみ潰しに訊いて回ったが、それでも見つからない。失意の二人は、家に戻りBokuの帰りを待っている。すると、Mr. Kinjoは、まるで何事もなかったかのように嬉しげにホットドッグを頬張っているBokuを連れて帰って来る。Bokuは、何と十四番通り (14th Street) まで行っていたらしい。腹ぺこのRinkoはMr. Kinjoが買って来てくれたホットドッグを頬張りながら、彼の車で家まで送ってもらう。彼は、あまりめでたいときではないが、今度の日曜日に、自分とTeruを祝うパーティがAuntie Hataの主催であることを話す。(XV)

そのパーティは日曜日、みんなが教会に行った後すぐに開かれることになる。Rinkoの家族は、Sugino家の大事件があったために、今年はクリスマス・ツリーやクリスマス・プレゼントをやめにして節約し、普段はお金に執着がないPapaとMamaも、Mr. Higaのためお金を集めるのに必死になっていたのである。Teruは縁起のよい鶴の絵が描かれている着物を着ている。テーブルの上には縁起物の尾頭付きの大きな魚が置かれている。しばらくすると、Johnnyを除くSugino家の人々がやって来る。Bokuはあのとときのショックからだいぶん立ち直ったようである。テーブルの上には、日本式のめでたい宴では欠かせない黒豆の甘煮、だいこんのなます、おすしなどの料理が並べられる。(XVI)

パーティの席上、Papaは長いスピーチを日本語で始める。彼は、TeruとMr. Kinjoのことについてお祝いの言葉を述べ、Teruが無事アメリカに來られて喜ばしく思うと述べた後、Mr. Higaに自分が集めたお金の入った封筒を渡そうとする。また、Mr. Kinjoも彼に自分が集めたお金の入った封筒を差し出し、こんなときだからTeruとの結婚を延期しようと思っていると言う。あくまでもそのお金を受け取ることを固辞するMr. HigaにPapaが受け取るように促し、やっとなこと彼にそうさせる。そのときRinkoは、Mr. KinjoこそがTeruにふさわしい男性で、「彼は彼女の幸福な結末だ」(“He is her happy ending” 109)と気づく。同時に、Rinkoは他人のために自分の結婚を延期することの同意したTeruは本当に強くて立派な女性であることに気づき、

「彼女は、わたしの助けを少しも借りずに自分の一番幸福な結末を成し遂げたのだ」(“She’d made her own happiest ending without any help from me at all” 109) と悟る。Rinko は、今まで自分がしてきたことを反省し、Mr. Kinjo に謝罪する。それに対して、Mr. Kinjo は快く彼女のことを許してくれる。Mrs. S. も大きな事件が解決して安心した様子である。気分がよくなった Rinko は Cal に「お前もついに大人になってきたようだな」(“I do believe you’re finally growing up” 111) と言われる。だが、そんなことは他人から言われなくても、彼女自身が一番よく、そのことを実感していたのである。(XVII)

## (2) Rinko のアイデンティティの確立

Rinko は前 2 作品 *A Jar of Dreams*, *The Best Bad Thing* それぞれにおいて、自らのアイデンティティを萌芽させ、そしてそれを形成させていることは前に述べた。そして、「Rinko 物語」としては 3 番目にあたるこの作品で、Rinko は自らのアイデンティティを確立させている。

確かに、Rinko は前 2 作品と同様に、この作品の冒頭の部分でこそ、自分の日本的な顔、直毛の黒髪、そして学校の先生たちも発音できないような日本人の名前に対して強い嫌悪感をあらわにしている。さらにその嫌悪感は、学校が終わった後に行かなければならない日本語の授業へと広がってゆく。けれども、その嫌悪感は、彼女が日系人であることを否定しようという根源的なところから来ているものではなく、「ただ他のアメリカ人と同じになりたいだけ」(“I just want to be like any other American” 4) という気持ちから来ているようである。言い換えれば、Rinko にとって、日本的顔、直毛の黒髪、日本人の名前、日本語の授業は、自分を他のアメリカ人とは違うものにしていくものに過ぎず、その意味でそれらに嫌悪感を持っているだけなのである。

しかしながら、Sugino 家で次々と起こる事件、たとえば、Mrs. S. の右腕の怪我、Teru と Mr. Kinjo の婚約、Mr. Sugino による Mr. Higa の貯金の使い込み、Sugino 夫妻の別離、それに Boku の家出などに直面し、自分なりにそれらを解決しようと努力する Rinko は、明らかに人間的な成長を遂げている。

Rinko の周りにいる日系人たちは、困っている人がいればすすんで力を貸し、そのためには自分のことを犠牲にするのも厭わないという人たちばかりである。たとえば、腕の怪我で家事ができない Mrs. S. の手伝いに Rinko を彼女のところへやる Mama、自分の夫に貯金をだまし取られてしまった Mr. Higa にすまないと思い、そんなひどいことをした夫を家から追い出し、何とかしてそのお金を返そうとする Mrs. S.、自分の家の家計を削ってまでお金を捻出し、それを Mr. Higa に渡そうとする Papa をはじめ Tsujimura 家の人々、自分たちの結婚式を延期してまで困っている Mr. Higa を助けようとする Mr. Kinjo と Teru はそのような人々である。困難に対してはみんなで力を合わせて立ち向かい、アメリカで力強く生きてゆこうとする、このような日系人たちを見て、Rinko は同じ日系人であることに誇りを持ち、自分も日系人として恥ずかしくないように生きてゆこうと思ったに違いない。

一口に日系人と言っても、この物語に登場する日系人はその立場や境遇によってそのアイデンティティに若干の違いがある。日本から留学して来ている大学生の Johnny は大学を卒業しても、移民制限法 (Immigration Act)<sup>8)</sup> により日本人のアメリカ帰化が禁止されているため、常によそもの (outsider) で外国人でいなければならないアメリカに嫌気がさしている。Mr. Higa は、お金を貯めて、いつの日か、家族を残してきた日本に帰ろうとしている。この二人のアイデンティティの在り方は、日系一世の多くが持っていたと思われるもので、日本人という強い自意識と、アメリカで成功し故国日本に錦を飾りたいという願望から成り立っている。対照的に Mr. Kinjo や Papa は、同じ日系一世ではあるが、一方では日本人としての誇りを持ち、日本文化を愛し日本人的生活様式を守りつつも、アメリカを愛し、いつかはアメリカ人になりたいという希望を持っている。この二人のアイデンティティの在り方は、前の二人のそれとは明らかに違い、日本人という誇りとアメリカに対する愛情が共存して成り立っている。

そのような二つのタイプのアイデンティティの狭間で Rinko は、自分のアイデンティティを求めて葛藤するが、日系二世でありながら 19 年間日本に滞在し帰って来た Teru のアイデンティティに、自分のアイデンティティのあるべき姿を見出す。Teru は「わたしは 19 年間、よい日本人だった。けれど、今、生まれ故郷に帰って来たのだから、よいアメリカ人になりたいと思う」(“For nineteen years I was a good Japanese. But now I’m back where I was born, and I intend to become a good American” 79) と言うように、彼女のアイデンティティは日系人としての誇りが根底にありながらも、まず第一にアメリカ人としての強い自意識から形成されている。これは日系二世としてごく自然で妥当なアイデンティティの在り方であろう。<sup>9)</sup> Rinko は Teru の姿に自分の姿を二重写しにし、Teru と同じようなアイデンティティを自分の中に確立するのである。

自分のアイデンティティを確立することに成功した Rinko は、この物語の最後に Cal から指摘を受けているように確かに人間的な成長を遂げている。さらに自分自身、そのことを自覚した彼女は、必ずやこれからの人生、日系二世としてアイデンティティをしっかりと持ち、困難に負けることなく強くたくましく生きてゆくことだろう。

## V

これまで見て来たように、Rinko のアイデンティティは、「Rinko 物語」3 作品にそれぞれにおいて、一作目 *A Jar of Dreams*, <萌芽>, 二作目 *The Best Bad Thing*, <形成>, 三作目 *The Happiest Ending*, <確立> という道筋を辿っている。Rinko の日系二世としてのアイデンティティは、日系人としての誇りが根底にありながらも、アメリカ人としての強い自意識から形成されていて、それはこれから先、Rinko が日系二世のアメリカ人として生きてゆくためには望ましいものである。そのようなアイデンティティを確立した Rinko は人間的成長を遂げ、大人の仲間入りを果たしたのである。その意味で、この「Rinko 物語」3 作品は、日系二世少女 Rinko

が人間的成長を遂げ大人になる過程を描いたものであり、いわば、「<sup>イニシュエーション</sup>通過儀礼」を描いた物語と見なすことができるだろう。

最後に、我々日本人がこれらの作品を含めた日系アメリカ人作家の作品を読むときの「望ましい」<sup>スタンス</sup>姿勢について考えてみたい。確かに、我々日本人が彼らの作品を読むとき、他のアメリカ人作家の作品を読むときに比べ、我々にはあらかじめ有利な立場 (advantage) を与えられている。それによって、あるいはその作品理解が容易で深遠なものになるかもしれない。だが、いったん我々はその有利な立場に甘んじ、彼らを日本人と同一視するという間違いを犯してしまうと、たちまち我々は不利な立場 (disadvantage) へと逆に追い込まれ、彼らの作品を読み誤ってしまうことになるだろう。

我々日本人は、日本人の血を受け継いでいる者、日本人の名前を持ち日本人的容姿をしている者を短絡的に「日本人」と捉えがちだ。そこまでゆかなくとも、我々の中には日系人は日本人と同じだ (あるいはそうだろう) というような誤解があるような気がする。我々は、日系アメリカ人が日本人である以上にアメリカ人であり、日本人とは違うことを忘れてはならない。逆説的な言い方ではあるが、とにかく日本人が陥りやすい、このような日系人に対する誤った認識こそが、本来なら有利な立場にいるはずの我々が日系アメリカ人文学を読解し文学的な評価をする際の大きな障害になっているのではなかろうか。

まず、我々が、日系アメリカ人、あるいはその歴史・文化的背景などについて正確に認識することが必要なことは言うまでもない。その上で、日系アメリカ人作家を他のアメリカ人作家と区別し特別視する (あるいは日本人作家と同一視する) のをやめ、彼らの文学を正統のアメリカ文学の流れの中に置き直し、正当に評価し直すことが求められているのである。

---

[注]

- 1) Yoshiko Uchida の経歴を記載するにあたっては、Florence M. Hongo et al ed., *Japanese American Journey: The Story of a People* (San Mateo, CA: Japanese American Curriculum Project, 1985), pp. 135-39 を参考にした。
- 2) 日系人の強制収容所については、Roger Daniels et al ed., *Japanese American: From Relocation to Redress* Revised ed. (Seattle, WA: U. of Washington P., 1991) に詳しい。
- 3) これらの作品についてはそれぞれ邦訳が出版されている。Cf. 『荒野に追われた人々』(岩波書店, 1982年), 『トパーズへの旅—日系少女ユキの物語』(評論社, 1971年), 『ユキの愛する人たち』(ひくまの出版, 1989年)。

- 4) 日系少女 Rinko を主人公とした作品「Rinko 物語」には、前掲3作品の他、短編小説“Uncle Kanda's Black Cat”がある。Yoshiko Uchida, "Uncle Kanda's Black Cat" in Hongo et al ed., *Japanese American Journey*, pp. 150-57. Cf. 拙訳・著「[[試訳と研究ノート] ヨシコ・ウチダ作「カンダおじさんの黒猫」], 『人文』鹿児島県立短期大学人文学会論集 第17号(1993年), 25-38頁。
- 5) Yoshiko Uchida, *A Jar of Dreams*, McElderry Books (New York, NY: Atheneum, 1981). 以下、本論Ⅱ章におけるこの作品の引用および参照は全てこのテキストに拠るものとし、同書からの引用頁数は算用数字で、また、参照箇所該当章数はローマ数字で本文中の括弧内に示す。
- 6) Yoshiko Uchida, *The Best Bad Thing*, McElderry Books (New York, NY: Atheneum, 1983). 以下、本論Ⅲ章におけるこの作品の引用および参照は全てこのテキストに拠るものとし、同書からの引用頁数および参照箇所該当章数の示し方は前章の形式に従う。
- 7) Yoshiko Uchida, *The Happiest Ending*, McElderry Books (New York, NY: Atheneum, 1985). 以下、本論Ⅳ章におけるこの作品の引用および参照は全てこのテキストに拠るものとし、同書からの引用頁数および参照箇所該当章数の示し方は前々章の形式に従う。
- 8) Immigration Act of 1924 のことと思われる。この法律によって、アメリカ合衆国への日本人を含むアジア系移民は全面的に禁止された。Cf. 大下尚一他編『史料が語るアメリカーメイフラワーから包括商法まで—』(有斐閣, 1989年), 168-79頁。
- 9) 確かに、このような日系二世のアイデンティティの在り方は、一つの典型的なものではあるが、それだけが全てではない。中には、日本的なものを全面的に否定し、自分自身をアメリカ人に完全に同化させるというアイデンティティの在り方もある。Cf. Bill Hosokawa, *Nisei: The Quiet Americans* (Niwot, CO: U. P. of Colorado, 1992), pp. 171-89. また、三世(あるいはそれ以降の世代)のアイデンティティの在り方は、一世や二世のそれとは違い、今や先進国の仲間入りを果たした日本という国に自分の起源があることにある種の誇りと喜びを感じる反面、実際は日本語や日本文化について極めて知識が乏しく、自分自身が完全なアメリカ人であることを強く認識しているというものである。Cf. David Mura, *Turning Japanese: Memoirs of a Sansei* Anchor Books (New York, NY: Doubleday, 1991).

(1993年10月1日受理)